

山本博士
還曆祝賀
記念論文集

京都帝國大學經濟學會

昭和九年一月一日發行

經濟論叢

第三十八卷第一號

(通卷第二百二十三號。禁轉載)

奉
呈

山本美越乃先生

執筆者一同

目次

尙書の虞夏書に見られたる經濟思想	法學博士 田島 錦治 一
酒の專賣に就きて	法學博士 神戸 正雄 二四
マールクスの認識論原理	文學博士 米田庄太郎 四四
植民の世界史的意義	文學博士 高田 保馬 五三
農業生産に於ける水平的分化と垂直的分化	經濟學士 八木芳之助 八三
我國工業に於ける小企業の殘存に關する一研究	經濟學士 大塚 一朗 一〇七
資本蓄積率の差異と固定資本	經濟學士 柴 田 敬 一三三
中央銀行兌換準備檢討	經濟學士 松岡 孝兒 一六〇
貨幣需要と貨幣の流通速度	經濟學士 中 谷 實 一六六
植民地時代米國の土地保有制度	經濟學士 堀江 保藏 一八九
米國の對玖馬投資とその影響	經濟學士 長田 三郎 二二七

免稅點以下の小額所得者	經濟學博士	汐見 三郎	二四〇
經營學の基礎概念たる資本、企業及經營	經濟學博士	小島昌太郎	二六〇
世界科學に就て	經濟學博士	作田 莊一	二七六
漁村更生策に於ける問題	經濟學士	蜷川 虎三	二九五
人口粗密の原因觀	法學博士	財部 靜治	三五五
徳川時代における植民的思想	經濟學博士	本庄榮治郎	三二九
ヘーゲル市民社會論と經濟學	經濟學博士	石川 興二	三四九
恐慌と蓄積と植民	經濟學博士	谷口 吉彦	三六九
北海道鮭漁業に現存の漁場賃貸借關係	經濟學士	岡本 清造	三九四
我國に於ける植民政策學の發達	經濟學士	金持 一郎	四一七
クレルウキアに就いて	農 學 士	若 木 禮	四四〇
山本美越乃博士年譜及著書論文目錄	經濟學士	高木 眞助	四七七

ヘーゲル市民社會論と經濟學

石川興二

現代社會問題はヘーゲルの所謂『市民社會』die bürgerliche Gesellschaftの問題であつて、この市民社會を如何にしてより高き人間生活の社會へ止揚するかと云ふことが現代經濟學の根本問題である。この市民社會止揚の問題に對して最も深き學的基礎を與へたものはヘーゲルである。かくて現代の經濟學はこの問題を根本的に考察せんが爲めに一度ヘーゲルにまで遡らなければならぬのである。

然るにこのヘーゲルはその『市民社會』論のはじめに於て¹⁾次の如くに述べて居る。即ち「國家經濟學 Staatsökonomie は此等諸觀點²⁾より出發點をとる、然る後に、乍然、大衆の關係並に運動をそれが質的並に量的規定及び發展に於て述べねばならぬ科學である。このものはそれが地盤としての新しき時代に於て成立したところの一の科學である。この學の發展は、興味ある事實を示めす。即ち思想 (S. Smith, Say, Ricardo スミス、セイ、リカルドオを参照せよ) が眼前にある諸個體の無數なるものから事物の單純なる諸原理を、事物の中に働いて居り事物を支配して居る悟性

1) Hegel, Grundlinien der Philosophie des Rechts. § 189

2) ヘーゲルがこの節に述べたところの市民社會の土臺を成す『欲求の體系』の本質的諸特徴を指す。

を如何にして見出すかを示めず。」と述べて居る。

こゝにヘーゲルが近世經濟學の思想をそれに参照して居るところのスミス、セイ、リカルドオの關係について見るに、スミスは近世經濟學の父であつてセイの經濟學もリカルドオの經濟學もスミス經濟學たる『富國民論』の一部ことにその原論的部分であるところの第一及第二兩篇を祖述したところのものである。即ちセイはスミスの大陸への紹介者であつた。またリカルドオはスミスの思想の一部を發展せしむるにつとめたのである。即ち『市民社會』と云はるべきところの經濟社會を經濟學の對象としてはじめて十分に確定したものは經濟學父アダム・スミスであつた。彼は産業革命の直前に立つて尙ほ中世的なる多くの淺糟を有していた當時の經濟社會を『自然的自由の體系』the System of Natural Liberty へ變革する爲めの實踐的經濟學『富國民論』(一七七六)を打立て以て近世經濟學の基礎を置いたのである。かく『市民社會』なるものはスミスに於てはその實現が『自然的自由の體系』として要望されたところのものであつた。¹⁾

ヘーゲルはスミスによつて學的に明確にされた此經濟社會を彼の『法律哲學』, Grundlinien der Philosophie des Rechts 1820 の中に於て『市民社會』として取入れることによつて、これに全く新なる光を投げ與へたのである。即ちヘーゲルの『法律哲學』は『法律』論と『道德』論と『人倫』論とよりなつて居るが、この『人倫』論は第一が Die Familie 『家族』であり第二が Die bürgerliche Gesellschaft 『市民社會』であり第三が Der Staat 『國家』である。而してこの三者は an sich, für

1) 拙著『精神科學的經濟學』第三編參照

sich, an und für sichの辨證法的發展的關係に立つてゐる。スミスの經濟社會はこの三段の辨證法的發展の中に於ける *es sich* の段階であるところの『市民社會』として取り入れられたのである。このことがスミスの經濟社會に全く新なる意義を與ふる所以は、かくてそれが歴史的社會的實在の本質的發展的構造の中に於てそれ自身經過し行くべきものとして而も人間歴史の發展が一度通過せざる可らざる本質的な一發展段階として把握されたが故である。

かくてヘーゲルは市民社會が本質上止揚せらるべきものなること並にそれを止揚すべき國家主義的方向を教へて居るのであるが、このヘーゲルを深く研究することによつて市民社會止揚の社會主義的方向を明にせんとせしところのものは現代の社會問題並に經濟學に對して最も重大なる影響を與へたマルクスであつた。即ち彼は彼自身の根本的立場について次の如くに述べて居る。

「私を惱ました問題の解決のために企てた最初の勞作は、ヘーゲル法律哲學の批判的修正 *die kritische Revision der Hegelischen Rechtsphilosophie* であつた。……私の研究は法律關係ならびに國家形態なるものは、それ自身によつて理解さるべきものでなく、また謂はゆる人間の精神の一般的發展によつて理解さるべきものでもなく、むしろそれは物質的の生活諸聯關——これが總和はヘーゲルが十八世紀における英佛人の先蹤に倣うて *„bürgerliche Gesellschaft“* 『市民社會』なる名稱のもとに包括せしところのもの——にその根據を有するものだ」と云ふこと、しかもこの市民社會の解剖學的研究はこれを *politische Ökonomie* 政治的經濟學のうちに求むべきものだ」と云

ふことの結論に達した。¹⁾かくて彼は政治經濟學の研究に没頭し、その「一般的結論」として所謂マルクスの唯物史觀なるものを得ると共にまたこれを「手引き」として更に經濟學の研究を進めたのである。

かくこのマルクス學はその骨子に於てヘーゲルの法律哲學ことにその『市民社會』論の『批判的修正』であると云ふことが出来るのであつて、ヘーゲルが國家を土臺として市民社會を理解せしに對して市民社會を土臺として國家を理解し、ヘーゲルが精神を原動力とする唯心史觀の立場に立つて市民社會を國家主義的に止揚したるに對して生産力を原動力とする唯物史觀の立場に於て市民社會の社會主義的止揚をその經濟學『資本論』(一八六七)に於て明にせんとしたのである。かく考へる時ヘーゲルは自ら現代の社會問題に對し最も深き基礎を與へると共にまた近世經濟學に於ける最も偉大なる二大經濟學者アダム・スミスとマルクスとを媒介することによつて經濟學史上に偉大なる效獻をなしたのである。以下かくの如き觀點よりヘーゲルの市民社會論と經濟學との問題を考察したいと思ふ。

而もこれが爲めには先づスミスの『富國論』との關係に於てヘーゲルの市民社會論を明にしなければならぬ。

二

ヘーゲルの市民社會は「三つの契機 Momente を含んで居る。」一は das System der Bedürfnisse

1) Marx, Zur Kritik der politischen Ökonomie (Kautsky) S. LIV 以下

『欲求の體系』であり、二二²⁶ die Rechtspflege『司法』であり、二三²⁷ die Polizei und Korporation『警察並に團體』である。この第一の『欲求の體系』が市民社會全體の土臺を爲すところの經濟社會自體であつて、他のものはこの特殊の原理の社會に對する、『普遍』の原理としての國家意志の關係の問題として考へることが出来る。

スミスの『富國民論』は五篇より成つて居つて、その内容は全體に於て第一第二兩篇は基本的對象としての經濟社會の理論的研究であり、第三篇は經濟史であり第四篇は當時行はれて居た重商主義政策の批判であり第五篇は國家意志の經濟社會に對する政策的考察であると云ふことが出来るであらう¹⁾。

かくてヘーゲルの市民社會論の第一『欲求の體系』は『富國民論』第一第二兩篇の經濟理論の對象に、而して市民社會論の第二第三は大體に於て『富國民論』第五篇に相當する。但しKorporation團體の論については更に考へられなければならぬであらう。かくて先づ『欲求の體系』とスミスの經濟理論の關係を考へる。

ヘーゲルの『欲求の體系』の論は三部より成立つて居る。a) Die Art des Bedürfnisses und der Befriedigung『諸欲求並に充足の様式』b) Die Art der Arbeit『勞働の様式』c) Das Vermögen『財産』である。私はこれを先づ、經濟理論の體系として考察して見よう。この體系はスミスの經濟理論の體系に發して居るが、而もそこには適切な發展がなされて居る。即ち既に述べたが如く²⁾

1) 拙著『精神科學的經濟學の基礎問題』。第三編第五章參照
2) 同書第三六三頁

スミスの經濟理論は三部より成つて居り、第一は「労働の生産力」論であり、第二はこの労働の生産力によつて生産されたる年生産物の分配論であり、第三はこの被分配物の適用論であつた。かくてヘーゲルの第一第二第三の各はスミスの第三第一第二の各に相當する。

先づスミスの第三にあつては生産的消費又は適用が主であつて固有の消費即ち生活の爲めの消費又は適用はあまり論ぜられて居ない。然るにヘーゲルの第一のものは固有の消費論の骨子としての欲求並にその充足論であり而もこの論が最初に置かれてある。このことは經濟理論の體系にとつて最も適切なる改善である¹⁾。即ち經濟社會なるものは「富」を中心とするところの文化域である而してこの富なるものは人間生活に役立つ爲めの使用價值と人間の生産的犠牲としての労働價值との二つの契機を統一して居るところのものである²⁾。即ち富なるものは人間生活の物的手段として消費せられんが爲めに人間の労働によつて生産されるところのものである。かくて富の消費生活と富の生産生活は人間の基本的經濟生活である。而も兩者の中富の消費は富の生産がその爲めに存するものなるが故に最も基本的な事實である。かくて富の消費論の骨子としての欲望とその充足を第一に考察し第二に労働を中心として生産を考察せるヘーゲルはスミスの體系を適切に發展せしめたところのものである。

次にヘーゲルの『欲求の體系』の第三はスミスの分配論即ち交換と狹義の分配を含んで居る廣義の分配論に相應して居るのであるが、既に第一及第二に論ぜられし欲求と生産の交錯として換

2) 本誌第三十七卷第六號拙稿『經濟本質論』參照

言せば需要と供給との統一として三者の「正」「反」「合」の辨證法的統一を完成して居る。かくてこのヘーゲルの經濟理論の體系は、經濟社會の理論にはじめて本質的な統一を與へたものと云はなければならぬ。而してこの第三のものには、廣く欲求と生産との統一として、交換、狹義の分配而して分配されたもの人間生活の爲めの終局的消費が含まれることとなる。

ヘーゲルの經濟論に於てかゝる適切なる體系が示めされたるに拘らず、經濟理論の體系は尙ほ久しくこの本質的な統一を取り入れなかつた。例へば普通に經濟理論の體系となつた四部門の分類がはじめて現れたゼームス・ミルの Elements of political Economy 1821 に於ては 1. Production 2. Distribution 3. Interchange 4. Consumption となつて居る。ゼ・ミ・ミル Principles of political Economy に於ては 1. Production 2. Distribution 3. Exchange となつて居る。而してこのヘーゲルに於ける本質的統一的な體系がはじめて經濟理論の體系として現れたのはヘーゲルより多くを學んだマーシヤルに於てである。彼の Principles of Economics の體系は I. Of Wants and their Satisfaction 2. The Agents of Production 3. General Relation of Demand, Supply and Value 4. The Distribution of the National Income である。即ち第一『欲求とその充足に就て』はヘーゲルの體系に於ける第一の『欲求とその充足の様式』とその名稱まで一致して居る。第二は労働を中心とする生産論であつてヘーゲルに於ける第二『労働の様式』に相應する。而して第三並に第四の價格論と分配論とはこの第一と第二とを統一するものであつてヘーゲルの第三に相當する。

ヘーゲルの經濟理論の體系は、かくの如くその三部が辨證法的統一を有する點に於て秀れて居るのみならず、更にこれ等三部の論の各は、何れもが辨證法的發展に於て展開されて居る點に於て秀れてゐる。即ち第一部に於ては欲求並にその充足手段の社會化し行く過程が第二部に於てはこの充足手段の生産の仕方の社會化し行く過程が第三部に於ては貧富の分裂對立し行く過程が考察されてゐる。この點に於てまたそれは經濟理論の體系にとつて教へるところが多いのである。これ經濟社會なるものは歴史的社會的實在であるが故にこれを體系的構造に於て明にするのみならず更に發展的構造に於て明にしなければならぬ。然るにマーシャル其他多くの人々の原論に於てはこの發展的構造が缺如している。

このヘーゲルの辨證法的發展の考をはじめて經濟學に取入れて偉大な理論經濟學を打立てたものはマルクスであつた。即ちマルクスの『資本論』はこのヘーゲルの辨證法の精神に立つて資本主義社會の發展的構造を徹底的に究明せんとしたのである。故に彼は次の如くに述べて居る。「私は、公然かの偉大なる思想家の門人たることを承認し、且つ價值論に關する章のこゝかしこに於て、ヘーゲルに特有な表現の仕方の眞似をすらしめた。」¹⁾而もマルクスは、ヘーゲルの唯心的辨證法を唯物辨證法に展開した。故に彼はこれにひきつゞいて、次の如くに述べて居る。「辨證法はヘーゲルの手において神秘化されたけれども、このことは決して、彼れがその一般的運動形態を、はじめて包括的な且つ意識的な仕方で、叙述したと云ふことを妨げはしなかつた。辨證法は彼にあつ

1) Marx, Kapital I. (Kautsky) S. XLVIII

ては逆立ちしてゐる。吾々は、神秘的な外皮の核心を發見するためにこれを顛倒しなければならない。「かくてヘーゲルの唯心的辨證法は、マルクスに於て唯物辨證法となつた。このことは兩者の經濟社會の辨證法的考察に於ても見られるところの相異である。即ち精神を以て一切の實在の發展の原動力と見るヘーゲルが市民社會の發展に於ても人間精神の向上の過程を見て居るに對し、經濟的生産力を以て歴史の辨證法的發展の原理力と見るマルクスは市民社會の發展に於てもまた生産力の發展を中心として見て居る。」

今日經濟理論は市民社會を辨證法的發展の過程に於て見なければならぬのであるが、而もマルクスに於けるが如く生産力の發展を見ると共にまたヘーゲルに於けるが如く人間精神の發展をも見なければならぬ。市民社會の將來社會への最も具體的なる辨證法的發展はこの兩者の發展を統一的に見ずしては考へ得ないのである。この點に於ても、物に傾いて精神を忘れ勝な經濟學者はヘーゲルに學ぶところが多いのである。然し無產者階級の階級革命の立場に立つて市民社會の發展を見たマルクスに向つては、このことは望み得られなかつた。また同様の理由に於てマルクスに於ては勞働價值が偏重せられ使用價值が輕視せられ従つて消費論なるものは見られなかつた。而も勞働と勞働價值の重視に於て有產者經濟學の片面觀を打破し經濟學の具體的なる發展を準備した點は、またマルクスの偉大なる效績であつた。最も具體的なる經濟原論に於ては、その總ての部門に於て具體的なる發展的構造を考察し、かくて市民社會全體の辨證法的發展的構造を明にし

なければならぬ。

次に我々はヘーゲルの經濟論の内容に入つて見よう。

(a)『欲求並に充足の様式』、ヘーゲルはこゝに人間の欲求並にその充足手段が自然的動物的状态より社會的人間的状态に解放される過程を見て居る。即ち「動物はその云はゞ限定されたる欲求の充足手段並に仕方の限定されたる圈を有して居る。」人間はこの自然的なる欲求を分化し多様化する事によりまたこれに相應してその充足の手段並に方法を分化し精練することによつて自然的動物的なる状態を超へて行く、この分化し精練し行くところのものは相互に影響し合ふて社會的なるものとなる。——こゝに我々はスミスに於ける市場の擴大を考へることが出来るであらう——かくて益々自然的必然性 *Naturnotwendigkeit* より解放される。これに反して所謂自然状態 *Naturzustände* は *Naturbedürfnis* 自然欲求が直接的な自然的な手段により充足され精神が自然の中に沈潜して居る状態である。かくの如くヘーゲルは欲求の發展をも辨證法的に把握して居る。即ち自然状態に於て直接的な *an sich* の状態にあつた欲求は分化して *für sich* の状態に至り更に社會的に統一され *an und für sich* の状態に至るのである。

欲求並にその充足手段の發展は自然より人間をかく解放するところのものであるが、而も市民社會に於ける人間の欲求の目的は特殊な自己の目的であるが故にこの解放は眞實なものではなく形式的なるものである。こゝにこの解放の限界がある。即ち「此解放は目的の特殊性がその根

概にある内容であるが故に形式的 *formell* である。欲求、手段、享樂の限界のない多様化特殊化へ向ふ社會の方向——即ち奢侈——は、無限な抵抗をなす素材即ち自由意志の所有物である特殊の種類の外的手段、従つて絶對的な抵抗力に關係しなければならぬところの依存性と困難との無限の増大である。¹⁾かくて「一方奢侈が高度に於てあるところには、また困窮並に卑賤が他方に於て同様に大である」²⁾こゝにヘーゲルは欲求充足に於ける對立矛盾の契機を見て居る。これは後に市民社會の一方に於ける富の蓄積と他方に於ける「勞働に結ばれたる階級の依存性と困窮」*die Abhängigkeit und Not der an diese Arbeit gebundenen Klasse* として見らるゝものものである。而してこの階級は正にスミスの所謂 *the great body of the people, that is the labouring poor* 「國民の大多數即ち勞働せる貧困者」である。マルクスがこの階級を無產者階級として資本家階級に對立せしめ以て資本主義的社會の生産的機構を明にして居ることについてはこれを後に述べる。

(b) 『勞働の様式』、こゝにはスミスの分業論に於ける勞働の論が辨證法的發展の形に於て要約されて居るのであるが、先づ勞働なるものが次の如くに述べられて居る。「特殊化されたる欲求に相應して同様に特殊化されたる手段を用意し調達するところの媒介が勞働 *Arbeit* である、それは自然から直接に與へられる素材を多種の目的の爲めに最も多様な手續によつて特殊化する。この形成は今や手段に價值とその合目的性とを與へる。かくて人間はその消費に於て主として人

1) § 195
2) Zusaz zu § 195

間的生産物に關係する。人間の消費するところのものは左様な勞力である¹⁾この勞働の辨證法的發展の過程は次の如くに述べられて居る「勞働に於ける普遍的客觀的なるものは、欲求並に充足手段の特殊化を生じ従つて同様に生産を特殊化し且つ分業を齎らしたところの抽象 Abstraktion に於て存する。個々人の勞働は分業によつてより單純となり、而してこの抽象的勞働に於ける技能並に生産物の量は増大する。同時に技能並に手段のこの抽象は、爾餘の欲求の充足に對する人間の依存性並に相互關係を全く必然的なるものに完成する。生産者の抽象性は勞働を益々機械化しかくて遂に人間が勞働から退き機械をして人間に代らしめることを可能にする²⁾」と述べて居る。この點は正にスミスがその分業論に云へる要旨を一括して居るのであつて而も人間欲求の進歩に於けると同様に、人間勞働の進歩が辨證法的發展に於て把握されて居る。即ち個々人の具體的な勞働は分化して抽象化され更にこれが統一されて機械となるのである。こゝにヘーゲルは「人間が勞働から退き機械をして人間に代らしめることを可能にする」と云ふて居るのであるが、マルクスは機械それ自身のかゝる本質的意義を認めると共に機械それ自身と個人の私有物としての機械を明確に區別しこの私有物としての機械そのものが勞働者階級と資本家階級とを決定的に分裂し機械の人間社會に對する眞の意義を發揮せしめざる所以を高調しこの兩階級の對立による市民社會の社會主義的止揚を明にすることを以つて中心的課題としたのである。

勞働はスミスに於ては勞働の生産力に於ける改善の原因としての分業論に於て従つて生産力の

1) 196

2) 198

觀點より考察されて居るマルクスに於ても生産力の觀點より而して結局労働搾取の觀點より考察されて居るのである。然しヘーゲルに於てはこの労働論に於てもその人間精神の向上に對する意義が考察されて居る。而してそれは「理論的教養」と「實踐的教養」との兩者について考へられて居る。「關心を有せしめる諸規定並に諸對象の多様性に於て理論的教養 die theoretische Bildungが發展する…悟性 Verstand 一般の教養であり従つてまた言語の教養である。労働による實踐的教養 die praktische Bildung durch die Arbeit は自己生産的な欲求並に仕事の習慣一般に於て、行爲を或は材料の性質に従つて或は主として他人の肆意に従つて制限することに於て、且つこの訓練によつて得られる客觀的な活動並に普遍妥當的な技能の習慣に於て、存する。」¹⁾

前述せし如く具體的な經濟學の生産論に於ては、労働はその生産する富に對する意義即ち生産力の觀點の外に更にかくの如く労働それ自身の直接人間生活に對する意義の觀點より、即ち二重の觀點より常に考察されて居らねばならない。

(c) 『財産』、こゝに於て以上論ぜられたる「欲求の充足」と「労働」との二面の統一として『欲求の體系』が具體的に考察されて居る。これスミスの所謂『商業社會』に外ならない即ち「分業一度完全に確立される時は、各人が自己労働の生産物に依つて充たす所は、僅に其欲求の極小部分に過ぎず、各人の自己労働の生産物中、自己の消費する以外の餘剰生産物を以て他人の生産物中自己の要する部分と交換し依て以て自己の欲求の望めて大なる部分を充たす。斯くて各人は何れも交

換することに依つて生活し、何れも或程度の商人となると共に社會それ自體も亦所謂る商業的社會なるものとなる。¹⁾この商業的社會がヘーゲルの『欲求の體系』であるが而もこのものもヘーゲルに於ては辨證法的運動に於て考へられて居る。彼は先づ次の如くに述べて居る。

「勞働と欲求充足の此の依存性と相互性に於て主觀的利己主義は、總ての他の人々の欲求充足に對する寄與に——辨證法的運動としての普遍による特殊の媒介に轉化する。かくて、各人は自己の爲めに獲得し生産し享受するところによつて、正にこのことによつて爾餘の人々の享受の爲めに生産し獲得する²⁾」と述べてゐる。これ正にスミスが「自己の利益の爲めに他人の自愛心に訴へ、自己が其人より得んことを欲するものを自己に與ふるは即ち其人の利益なることを彼等に示めず時は單に其人の恩惠に訴ふるよりも遙に其目的を達し易い。…我々が日常互に必要とする他人の好意斡旋を幾多の他人より享受するは多くかゝる方法に據るものである³⁾」と云ふてゐるところのものを辨證法的に把握したのである。

スミスはかゝる社會に於ては「各人の技能の異なる生産物は…云はゞ共同の蓄積の中へもたらされる。而してこの共同の蓄積に於て各人はその必要とするところの他の人々の技能の如何なる部分をでも買ひ求め得るのである。⁴⁾」と述べて居るが、この社會全體の富への分與がこゝに説かれて居る。ヘーゲルは、これを普遍的財産なるものと特殊の財産なるものとの關係に於て考察して居る。即ち「總ての人々の依存性の全面的な組合せに存するところの此必然性は、今や各々の

1) Wealth of Nations. p. 24

2) § 199

3) Wealth of Nations. p. 13

4) 同書. p. 18

人にとつて普遍的持續的産財 *das allgemeine, bleibende Vermögen* であつて、この産財は各人の生存が確保される爲めに各人がその教養と技能とによつてそれに分與するところの可能性を含んで居る。¹⁾而してこの各人の可能性が即ち各人の「特殊産財」であつて、この各人の特殊産財は種々なる事情によつて條件づけられて居る。即ち「普遍的産財」に於ける分與の可能性 *Die Möglichkeit der Teilnahme* であるところの特殊産財 *das besondere Vermögen* は然し或は直接的な各人の基礎 (*Kapital* 資本) によつて或は技能によつて條件づけられて居る。この技能はそのものとしてまた資本により偶然な事情によつて制約されて居る。この偶然の事情の多様性は既にそれ自身不平等な自然的肉體的並に精神的素質の發展に於ける差異性を生む。この差異性は特殊性のこの域に於て總ての方向に向つてまた總ての段階から現れて他の偶然性並に肆意と一緒になつて諸個人の財産並に技能の不平等を必然的に結果するところのものである。²⁾」

かくの如く普遍財産に對する各人の分與は單なる *Möglichkeit* 可能性たるにすぎない。故にそれは本質上、偶然的なものである。またこの可能性の基く條件は本質上不平等なものである。この偶然性と不平等との發展として、市民社會の發展が『警察』の論の中に於て考察されて居るのであるが、この論に於て我々はヘーゲルの經濟論のマルクス經濟學に對する關係に注目しなければならぬ。以上のヘーゲルの經濟論は主としてスミスの經濟理論を彼の唯心的辨證法的發展の中に取入れたものであつたが、マルクスの經濟學はこのヘーゲルの市民社會の發展的考察をマルクス

1) § 190
2) § 200

の唯物辨證法に於て具體的に發展せしところのものである。即ちこの意味に於て我々はスミスとマルクスの媒介としてヘーゲルを考へることが出来るのである。

三

こゝにヘーゲルは家族的社會に於ける人間の經濟生活の市民社會のそれへの發展を次の如くに述べて居る。

「個人が普遍的財産から何かを得ることが出来る手段並に技能に關してもまた突然無能力になつた場合に於ける個人の生存並に世話に關しても、個人のこれ等主觀的の側の爲めに配慮するところの最初の實在的全體は家族である。然るに市民社會は個人を此結びから切り離りはなしその成員を互に疎隔し獨立人として認める。市民社會は外的無機的自然と各の生存の土臺たる郷土の地盤の代りに市民社會の地盤を置き、全家族そのものの存立を市民社會への依存性に即ち偶然性に隷屬せしめる。かくて個人は市民社會の子 Sohn der bürgerliche Gesellschaft となつた」¹⁾マルクスはこのヘーゲルの思想にも強く結びつて居る。即ち彼は市民社會への人間の發展を原始共產體よりの解放であるとして把握して居る。即ち「かゝる自由競争の社會に於ては、個人は、それ以前の諸歴史時代に於て彼れを一定の局限された人間集團の所屬員たらしめたる自然的紐帶等から、解放されて現れる」²⁾また曰く「吾々が歴史を遠く遡れば遡るほど、個人は、従つて生産する個人は、非獨立的な、一つの大きな全體に屬してゐるものとして、現れる。最初にはなほ全く自然的

1) § 238

2) Marx, Kritik der politischen Ökonomie S. XIII

な仕方では家族におよび種族にまで擴大された家族に後には種族の對立と融合から生じた種々なる形態の共同體に¹⁾と述べて居る。

かく家族的共同體より切り離なされた市民社會の諸個人にとつて「普遍的財産への分與の可能性」たる各人の「特殊財産」なるものは偶然性に投げ従へられて居る。即ちヘーゲルは曰く

「各人の肆意と同様に偶然的な物理的な而して外的諸關係に於て存する諸事情もまた諸個人を貧困に陥れる。この貧困の状態なるものは個人に市民社會の欲求を與へて置きながら而も——市民社會が同時に彼等から自然的生計手段を剝奪し血族としての家族の廣き結びを排除することによつて——社會の總ての便益、即ち技能並に教養による生計能力一般、また裁判、衛生、屢々宗教の慰藉等をさへも、多かれ少なかれ失はしめる。²⁾」即ち人々の生活の基礎をなしていた自然的生活手段や家族を破壊した市民社會がこの社會に於ける欲求のみを與へて而も充さず社會の有する生活並に慰藉の爲めの便益を奪ふた状態が貧困である。そこに貧富兩階段の對立が進む、即ち「市民社會が妨げられざる活動に於てあるならば、社會はその内部に於て人間並に産業の發展に於てある——欲求による人間の聯關の普遍化と、欲求の爲めの手段を用意し調達する仕方の普遍化によつて——この二重の普遍性から最大なる利得が得られるから——富の推積が一方に於て増進する。同時に他面に於て特殊の労働の個別化と制限性とがこの労働に結ばれて居る階級の依存性と困窮を増進する。このことに市民社會の廣く諸能力の殊に精神的諸利益の感受及び享受の無能力が關聯して

1) 同書 S. XIV

2) Hegel, Rechtsphilosophie. § 241

居る。¹⁾こゝに「欲求による人間の聯關の普遍化」と云へるはさきに「欲求とその充足の様式」論に於て説ける欲求充足の社會化である。即ち生産物に對する需要が社會的に擴大し行くことである。またこゝに「欲求の爲めの手段を用意し調達する仕方の普遍化」と云へるはさきに「労働の様式」論に於て述べられてゐた労働の社會化であつて機械等が發達し大規模生産が行はれることである。かくてこの二種の普遍化より資本主義的²⁾生産組織が發達し従つて利潤が増大するのである。而もこれと共に他面「労働者階級(die an diese Arbeit Gebundenen Klasse)の依存性と困窮が増大する」³⁾とをかく明確に對立せしめて居るのである。この點に於てマルクスの有産者階級無産者階級の對立増進の根本思想はヘーゲルに於けると異ならないのである。只だマルクスはこの對立の増進を餘剩價值説を以て明細にして居るに過ぎない。

更にヘーゲルは次の如くに云ふて居る。「社會の成員に對して必要なものとして自ら支配して居る或生存の仕方の標準以下に、大衆が落ち行くことは――而してこのことによつて自らの活動並に労働によつて自立すると云ふ權利正義名譽の感情を喪失する結果となり――賤民 das Pöbelを生ぜしめる。賤民の發生は同時に更に少數者の掌中に不釣合な富の集中を一層容易にすることを伴ふ。²⁾」而して「貧困それ自身は何人をも賤民としない。賤民とは貧困に結ばれて居る氣持即ち富者社會政府等に對する內的激昂によつてはじめて規定される。³⁾」このヘーゲルの思想はマルクスの資本の集中、無産者階級に於ける階級意識の成立、この無産者階級による階級革命等の根本思想に結ばるところのものである。

かくてヘーゲルは曰く「貧困者の生存が労働によつて(労働の機會によつて)媒介されるとする

1) 243
2) 244
3) Zusatz

ならば、生産量は増大されるであらう。この生産の過剰とそれに相應する自ら生産的な消費者の
缺茹に於て正に害悪が持續する。この害悪は兩方の仕方で増大する一方である。市民社會は富の
過剰 *Übermasse des Reichthums* にかゝはらず貧困の過剰と賤民の發生を防止するに足るだけ十分
に富んで居ない *nicht reich genug* 即ちそれに特有な財産を十分持つて居ないと云ふことがこゝ
に現れて来る。¹⁾「この生産と消費の矛盾によつて市民社會は其限界に來る即ち「この市民社會の辨
證法によつて市民社會は自己を飛び越へる。」²⁾」

かくの如くヘーゲルは資本主義社會が尙ほ成立の過程にあつた當時に於て既にその矛盾と矛盾
の發展とをかくも鋭く把握して居る。マルクスはこれを彼の根本思想としてそのままに取入れこ
れを經濟理論によつて具體的に展開した。而もヘーゲルの立場に於ては市民社會を國家主義的に
變革することとなり、マルクスの立場に於てはこれを社會主義的に變革することとなるのである。
この相異を生ずるに至れる所以は別に詳論しなければならぬが、今これを一言にして云へば、
市民社會に於て分裂對立して居る特殊性と普遍性との二原理につきヘーゲルは後者をマルクスは
前者を本質的原理と考へたが故である。

即ちヘーゲルの市民社會に於ては諸個人意志の特殊的原理が『欲求の體系』として前面に現らは
れ、國家意志の普遍的原理は背後に潜在してこの『欲求の體系』の世界を牽引して居るにすぎない。
この市民社會の構造を其儘人間社會の本質的構造となし以て「ヘーゲルの法律哲學の批判的修正」
をなしたマルクスにとつては、特殊な個人意志の原理が本質的なものであつて普遍的なる國家
意志の原理は特殊的原理に全く還元せられ支配者階級によつて被支配者階級の支配の爲めに利用

245
1) 245
2) 246

せられるところのものにすぎなかつた。かくて市民社會に於ける必然的な社會惡としての階級對立はこの階級對立と云ふ特殊の世界の原理のみによつて止揚されねばならなかつたのである。これマルクスに於る階級對立階級革命の理論である。

これに反してヘーゲルに於ては市民社會は彼の理論學に於ける Wesen の構造によつて把握されたのであつて市民社會に於て前面に現れて居るものは特殊の原理であるが而も背後にあるところの普遍的な國家意志の原理が本質的なものであり前面にあらはれて居る特殊の原理はこの本質的なものの現象であると考へられた。かくて市民社會は der äussere Staat 『外的國家』として不完全なる國家である。故に市民社會の特殊の原理に於ける矛盾が高まりかくしてその背後にあるところのこの普通の原理が前面的に現れ來り特殊の原理をその中に止揚するならばこゝに眞の『國家』 Staat が實現すると考へたのである。かくてこのものは、マルクスに於ける將來社會としての『自由の王國』が特殊の原理に墮したと反對に、普通の原理に墮したものである。かくてマルクスが廣義の個人主義に墮すると共にヘーゲルは國家主義に墮するのである。この共に片面的な立場を止揚して、我々は將來に向つて、普通の原理と特殊の原理とが眞の統一をなせる社會の實現を求めねばならない。これ即ち國民主義の立場である。この點に關して、ヘーゲルが市民社會より國家への過渡點とせる「團體」の考へは多くの示唆に富んで居る。またヘーゲルに於ける工業階級と農業階級との把握もこれが爲めに考へらるべきところのものである。然しながらこゝにはヘーゲルの經濟思想をスミスとマルクスとの媒介として考察することを主としたるが故にこれ等については改めて論ずることとする。

1) 本誌第三十七卷第四號拙稿『市民主義、國家主義、國民主義』參照